

電子版

# 文学教材の解釈

ブラッキーの話

西の魔女班

P127  
L18~

ママは、そうそう、と今まで何  
度もくり返した話を、うれしそう

に語り始めた。

注文の多い料理店

「ごんぎつね」

①いつもは、赤いさつまい  
い元気の良い顔が、今日は

寺田 守編著

少年の日の思い出

京都教育大学

国語教育研究会

んだかしておれ、いませ  
赤いさつまいも、赤いさつまいも

赤いさつまいも、赤いさつまいも  
赤いさつまいも、赤いさつまいも

なんだか…… 感覚的に  
なんとなく思う感じ。

しおれて、しまったさつまいもが  
しおれて、しまったさつまいもが

しおれて、しまったさつまいもが  
しおれて、しまったさつまいもが

夢十夜

すると女は黒い眼を眠そうにみはったまま、やっぱり  
静かな声で、でも、死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

「すると」という言葉で、女は男の問いかけに応じている。しかし、  
死ぬことを前提として、女が「やっぱり」と眼を閉じたまま、

「眠そうに」という言葉で、眼を閉じれば死んでしまふ状態への移行  
をかううじて耐えているように感じられることでもわかる。また、「せぼ

り」という副詞も「静かな声で」に掛かると同時に、「死んでしまふ」の  
しかたがないわと言った」という、逆語に掛けると、死を白紙とし

た言葉とされる。  
「でも」という言葉からは、死んでほしくないという男の願望が、

「私」が「私」の願望の双方へ否定の意が読める。また、死  
を前提として、女が「やっぱり」と眼を閉じたまま、

「眠そうに」という言葉で、眼を閉じれば死んでしまふ状態への移行  
をかううじて耐えているように感じられることでもわかる。また、「せぼ

り」という副詞も「静かな声で」に掛かると同時に、「死んでしまふ」の  
しかたがないわと言った」という、逆語に掛けると、死を白紙とし

た言葉とされる。  
「でも」という言葉からは、死んでほしくないという男の願望が、

「私」が「私」の願望の双方へ否定の意が読める。また、死  
を前提として、女が「やっぱり」と眼を閉じたまま、

「眠そうに」という言葉で、眼を閉じれば死んでしまふ状態への移行  
をかううじて耐えているように感じられることでもわかる。また、「せぼ

り」という副詞も「静かな声で」に掛かると同時に、「死んでしまふ」の  
しかたがないわと言った」という、逆語に掛けると、死を白紙とし

た言葉とされる。  
「でも」という言葉からは、死んでほしくないという男の願望が、

「私」が「私」の願望の双方へ否定の意が読める。また、死  
を前提として、女が「やっぱり」と眼を閉じたまま、

# 目次

はじめに

來住翔太、寺田守

.....

1

## 1 小学校編

一 こんぎつね (新美南吉)

市川奈央子、片岡文、田中麻佑子、辻友葵

.....

4

二 注文の多い料理店 (宮沢賢治)

日下部真依、口石梨絵、児玉萌、清水愛美

.....

15

三 カレーライス (重松清)

井上小夜、加藤修治、中山莉麻、野田奏恵

.....

34

四 ブラツキーの話 (梨木香歩)

小山明里

.....

43

五 紅鯉 (丘修三)

寺田守

.....

52

## 2 中学校編

六 星の花が降るころに (安東みきえ)

日下部真依、口石梨絵、児玉萌、清水愛美

.....

62

七 少年の日の思い出 (ヘルマン・ヘッセ)

井上小夜、加藤修治、中山莉麻、野田奏恵

.....

73

八 タオル (重松清)

寺田守

.....

92

九 卒業ホームラン (重松清)

來住翔太、千葉大暉、溝口智大、柳井光一

.....

102

一〇 盆土産 (三浦哲郎)

梶原悠平、川村亮介、中寫一貴、村井隆人  
.....

119

一一 走れメロス (太宰治)

梶原悠平、川村亮介、中寫一貴、村井隆人  
.....

135

一二 終わりのない散歩 (石田衣良)

石田光、笹原愛、中島大輔、宮川沙和、邊見唯  
.....

145

一三 高瀬舟 (森鷗外)

小山明里  
.....

156

一四 故郷 (魯迅)

市川奈央子、片岡文、田中麻佑子、辻友葵  
.....

169

### 3 高等学校編

一五 夢十夜 (夏目漱石)

岸美位、小山明里、前原陽一、山本舞  
.....

176

一六 婪り (辻邦生)

來住翔太、千葉大暉、溝口智大、柳井光一  
.....

187

一七 城の崎にて (志賀直哉)

田中大樹、谷口唯、安福佳奈、水上志織  
.....

200

一八 舞姫 (森鷗外)

河邊建、小林大希、永安聡子、帆足憲和  
.....

208

おわりに

石田光  
.....

219

# はじめに



來住 翔太、寺田 守

『文学教材の解釈 二〇一二』は、文学教材の研究資料集の第二集である。対象とする学年は小学校から高等学校まで、全十八編の教材研究をまとめた。教材の本文から、文の意味、言葉の意味をまとめ、授業づくりの資料となることを目的とした。教材研究をするにあたり、次のような構成で作業を行った。

- 1 作者と作品について：作者の経歴、作品の背景について調べ、まとめた。
- 2 叙述：作品の叙述を、一文単位で引用し、読み取れる意味を記述した。
- 3 考察：担当者が解釈する中で抱いた主題、疑問点、人物像などを考察した。

本書の作成に当たり、重点が置かれたのが、②叙述である。一文単位で本文を引用し、その一文から読み取れる意味を抽出した。叙述の意味は、担当グループの議論を経た解釈であるが、まだ議論の余地を残すものもある。

「卒業ホームラン」（重松清）の中の一文を解釈した例をあげる。強調部分が引用である。

**打席できよとんとする智に、ダイヤモンドを一周しろとあごで伝えた。**

「一周しろ」と声に出さず「あごで伝えた」というのは、指示・指図という性格を持つ行動である。「智」のためを思っていることではなく、「ホームラン！」と言って「智」を励まそうとする「佳枝」の気持ちを気遣ったことではないか。

一方、「佳枝」の気持ちを気遣うというよりは、「佳枝」が「智」を気遣ったように、「徹夫」にもその「智」への気遣いがあったと考えることもできる。

この部分において、担当グループでは、「佳枝」を気遣う「徹夫」の発言だという考えだった。しかし、他のグループとの議論の中で、後者の意見も出され、納得したため、双方記載した。この議論において、読者による解釈の多様性を認識し、さらに、ここでの解釈はあくまで「客観性を

意識した主観的内容」であるということも確認した。その他の文の解釈についても、記載した解釈以外の可能性も残すものとなっている。

とはいえ、担当者が詳細に考察した各章は、授業を展開するうえで読み落としてしまいかねない内容について熟考されている。冒頭にも述べたように、授業をつくるに当たり、本書を用いることにより、よりタフな読解を児童・生徒と行っていくことができる。

言葉を指差し、そこから意味を紡ぎ出すことで解釈は豊かになっていく。そうした言葉の意味を紡ぎ出すために、四つの解釈のコツを本書では用いた。

**a. 言葉の削除による意味の変化（この言葉があるのとないのでは、意味がどのように変わりますか。）**

言葉を削除してみても、その言葉があるのとないのでは一文の意味がどのように変化するかを考える。また、その言葉を使った例文を考えてみて意味を考える。例えば「ごんぎつね」の末尾に「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」という文がある。ここで「まだ」という言葉に注目したい。「まだ」「もう」「なんか」「だろう」「ね」といった言葉は、話者の判断や心的態度が現れる表現である。青いけむりが「まだ」出ていたのだから、話者はけむりがもう出ていないと思っていた。それくらい長い時間がたったように思われた。ところが見てみると、「まだ」けむりが出ていた。長い時間がたったように思われたが、実際にはわずかな時間しか流れていないことに気がついた、という意味が「まだ」という言葉からわかる。「まだ」とか「もう」といった副詞などの言葉には、言葉の削除は有効である。が、助詞や動詞など、削除してしまうと構文が壊れてしまう言葉まで削除することはできない。そこで第二のコツが必要となる。

**b. 類義語への置き換えによる意味の変化（AとBとでは意味がどのように変わりますか。）**

類義語を読者が持ち込み、言葉を置き換えて比較することで、二つの文の意味の違いを考える。文の意味が違うということは、置き換えた言葉の意味が違うということである。例えば、「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」と「青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ました。」のように、「出ていました」と「出ました」とを比較する。「出ました」だと、たまたま目をやった時に青いけむりが出たということになるが、「出ていました」だと、見ていない間にもけむりは絶えず立ち上っていたことがわかる。辞書作りなどで用いられる意味論の方法である。

解釈には想像力が働くし、また必要でもある。想像とは状況を補って理解するということである。読むという行為は、言葉を正確に読み取ることに加えて、積極的に読者が想像力を働かせて参与する営みだと言える。そこで第三のコツが必要となってくる。

**c. 動作化・映像化による意味理解（今ここで試してみたらん。どういう光景か思い浮かべてたらん。）**

例えば、「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。」とある所で、私たちは、ごんと兵十、加助との距離は何メートルだろうか、と想像する。

時間にもよるが、二、三メートルくらいだろうか。想像してみることで、月のいい晩だから、影もくつきりと映っていたらう、踏んでいる影は、きつと兵十の頭の部分だろう、加助の影ではなくて、兵十の影を踏んでいるのだから、兵十にとっても関心があるのだろう、といったことがわかる。こういった解釈法は、演劇的手法を用いて解釈する方法や、〈見え〉先行方略として知られている。

動作化・映像化は読者の経験に依存する。本文と似た状況の経験を想起することで、書かれていない情報を補うことができる。そこで最後のコツが必要となる。

d. 自分の経験との関連づけによる意味づけ（これと似た経験はありますか。）

「いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。」という一文がある。実際にうなぎをつかんだ経験を思い出してみると、うなぎの表面がぬるぬるしている上に、うなぎも逃げようとうねうねと暴れるので、掴みにくい。力を入れればいれるほど、うなぎがすりりと抜けていく、という状況が思い出される。思い出す経験は、直接体験だけでなく似たような物語を知っている、といった間接体験でもよい。こうした経験との関連づけは、間テクスト性を発見する原動力となる。

本書は、京都教育大学教育学部の平成二十三年度・二十四年度演習科目「国語科教育演習c」受講者の成果をまとめたものである。明らかな誤りは寺田が修正したが、不備も多く、既述のように誤謬や不確かな解釈も残されている。御批正を仰いで、改善していきたい。本書が、国語科教育の糧となれば幸いである。

なお、第一集は左記のホームページでも公開している。こちらも参照して頂ければ幸いである。

<http://kyoshien.kyokyo-u.ac.jp/public/terada/bungaku.pdf>